

とよがわほうすいり

# 豊川放水路

所在地：愛知県豊川市 竣工年：1965（昭和40）年

管理者：国土交通省 中部地方整備局 豊橋河川事務所

認定理由：豊川放水路は、豊川の洪水被害を軽減するために戦後に建設された、我が国を代表する放水路の一つです。

中部地方の  
選奨土木遺産

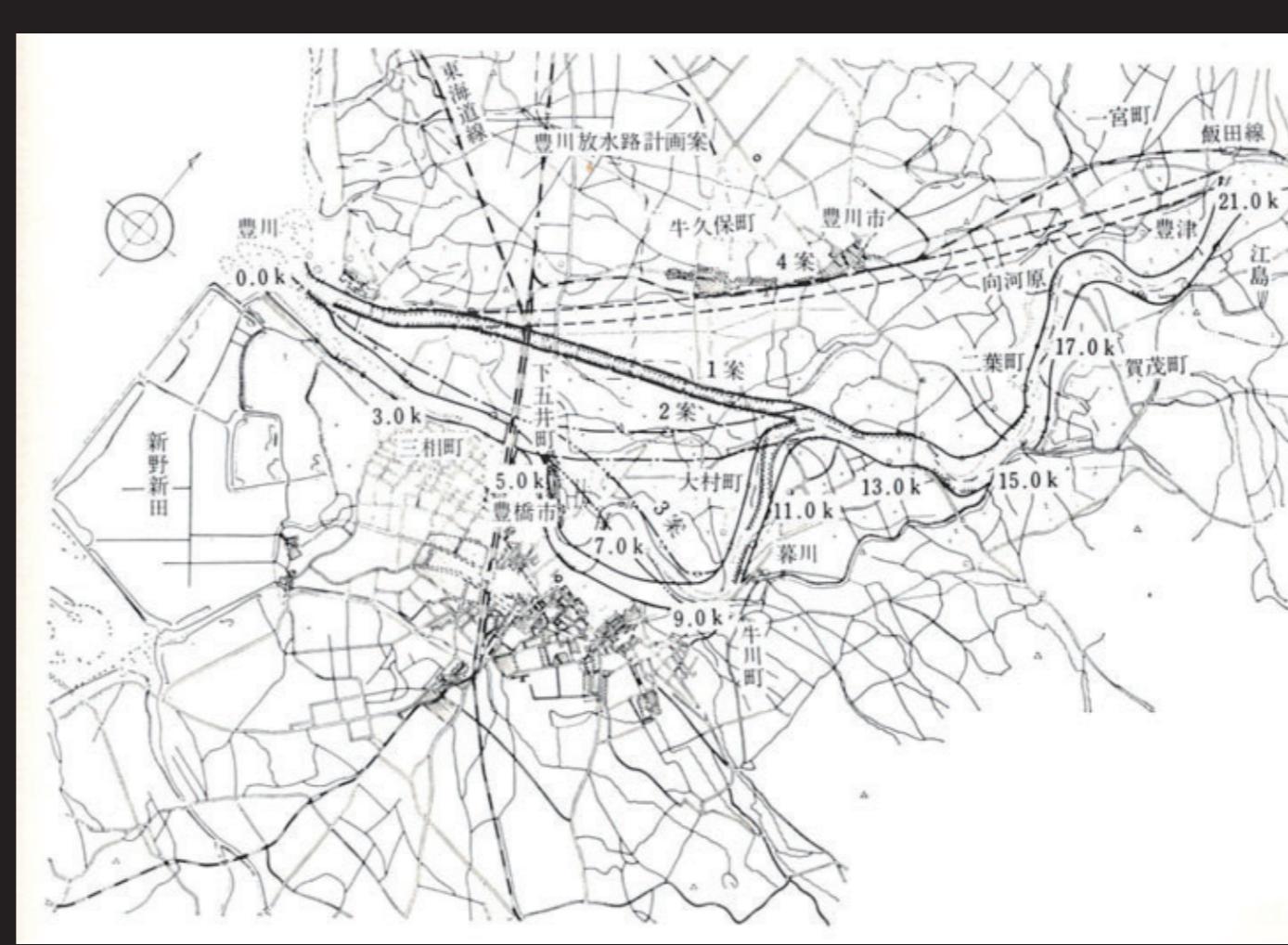
令和4年度登録



上空からみた現在の豊川放水路（2 km付近）（提供：国土交通省豊橋河川事務所）

豊川は段戸山を水源とし三河湾に注ぐ延長約77km、流域面積約724km<sup>2</sup>の一級河川である。その流域の特徴は、一級河川としては流域が小さく、上流域は勾配が急であり、上流で降った大量の雨が一気に下流の平野へと流出する。また中下流部は勾配が緩く、そのため河道が大きく蛇行する。このような流域特性によって、豊橋市を含む下流域は度々水害に見舞われてきた。そのため、豊川流域には霞堤が発達し、水害対策が古くから行われてきた。

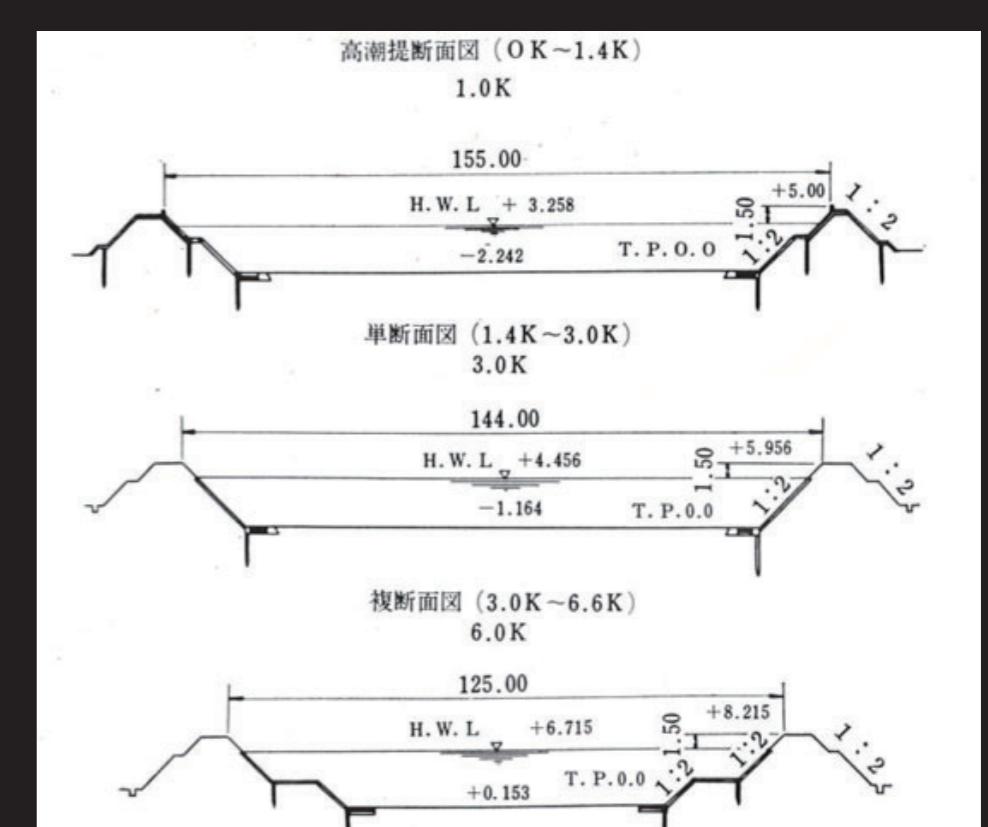
近代に入り、昭和10年（1935）「豊川改修二関スル促進建議書」が帝国議会で認可され、大正11年度（1922）より内務省（当時）が調査を開始し、昭和2年度（1927）に川幅の拡張を含む「豊川改修計画」が樹立された。この中に放水路が計画として取り上げられたものの、大蔵省が難色を示したことから予算通過は叶わなかった。よって、建設省内では改修費低減のための検討が進められた。そんな中、豊川町に海軍工場が設置され、昭和12年以降、戦局に突入するとともに海軍からも豊川改修の要望が高まり、昭和12年によく帝国議会の承認を得、昭和13年に工事着手したものの、大戦の影響で工事が一時中断、昭和25年により再開、着工後27年間を経て昭和40年に完成した。



▲ 豊川放水路計画案。豊川放水路の線形の決定に際して、計画時には4つの案が提案され、市街化、鉄道橋の位置、工費等を勘案し、現在の線形が決定された。（豊川放水路工事誌）



▲ 分流堰の現状。分流堰は当初固定堰を予定していたが、放水路の河床変動を考慮し、有効幅員95mのうち固定堰2スパン、可動堰1スパンの構成とし、可動堰には流水中のゲート昇降を考慮してD型シェル越流門扉を採用した。（筆者撮影）



▲ 標準断面図。水路の延長は6.6kmにほぼ直線に開削・築堤した新川であるが、下流2kmは準用河川江川を利用している。築堤用の土砂はすべて低水路の掘削土砂を利用している。竣工当時、護岸は下流部2.2kmまでが高潮堤防としてコンクリート張となっている。（豊川放水路工事誌）

